

## メープルレター（90）

### 流れる時

時は音もなく流れていきます。一年が終わろうとしております。

どきどきするハロウィーンも終わりました。例年に比べ暖かい、良く晴れた日でした。娘一家は羊に変装し、義理の長男一家は豚と魔女に変装していました。買い物に行けばスーパーのレジは海賊のお兄さん、働く従業員はワニ、デリバリーのお兄さんはエイリアンなどどこに行っても、ドキドキする日でした。日の出は遅くなり、日の入りは早くなり、時間も冬時間に切り替えられました。寒さも増してきました。

さてさて、マダム田中は、こうした日々の中、病院にほぼハラスメントに近いほど頻繁に連絡を入れ、手術の日を待っていました。ある日のこと、

「キャンセルが一人入っているのですが、貴女、代わりに手術受ける気はありますか？」

飛行機の予約変更に近いトーンで病院から連絡がありました。手術は2日後でした。医療事情が悪く、ケツベクの厚生大臣が手術の遅れを宣言していたばかりなので、

「受けます、受けます。」

マダム田中は、すぐさまオーケーしました。これを逃したら何時になるのか見当もつきません。娘に連絡を入れて付き添ってもらうことにしました。早朝に入院し、夕方には帰る、日帰りの手術です。これほど長い日があるのかと思うほど長い日でした。早朝手術登録の手続きを終え、手術箇所のガイダンスのメタルを放射線科で入れるまで待つこと3時間。その後、待合室（というより、ベッド一個の仕切り）で手術を待つこと更に3時間。入れ替わり立ち替わり看護婦が様々の検査に出入りし、最後に担当医がやってきて、

「どう？大丈夫ですか。ここをとりましょうね。では、15分後にね。」

優しく微笑みながらそう伝え、マーカーで手術箇所をマークし、手術承諾のサインをもって消えていきました。やがて手術室に運ばれ、チャーミングな女性麻酔科医が、インターンと共に麻酔の準備に入りました。ここでも山のような質問と検査でした。インターンに

「貴女、やってみる、麻酔の注射？」

「そうそう、そんな感じ、ヤッパリ難しいかなあ。どれどれ、私がやってみるわね。」

インターンの注射の失敗で穴だらけになった私の右手の血管に、一秒で麻酔科医の注射器がさされました。全身麻酔です。麻酔が打たれると酸素マスクをつけられ、

「大—きく息を吸ってはいてください。」

息を5-6回繰り返した後は、記憶はありません。気がつくと麻酔から覚め、入れ墨が腕にいっぱい入った看護婦さんが、微笑みながら見ていました。娘とドリトル先生もやってきました。看護婦さんは麻酔から覚めたのを確認すると、

「じゃーね。元気でね。手術は成功よ。」

と言って去っていきました。さー、これからがいそがしかったのです。他の看護婦さんがインターンと一緒にやってきて、更に検査を続けました。状態を確認すると、分厚い封筒を手渡し、

「この中に今後の事を書いた紙が入っています。これに従って自分で手当てをしてください。薬の処方箋と術後の担当医とのアポの通知の紙も入っています。帰りがけに薬局によって薬を買って、すぐ飲み始めてください。」

薬局によってみると、この処方箋は他の担当医の他の疾患の人に宛てたものでした。あー危ない。術後の薬はこれと同じだったと以前聞いた記憶があったので、担当医の名前だけ変えてもらい、買って戻りました。麻酔が完全に抜けきれないぼ—とした症状があっても、闘いです。ということは、アポの紙ももしかしたら他の人のもの？ ピンポ

ーン、全然違う人のものでした。翌々日には、病院に連絡をいれ、癌病棟のリエゾンの看護婦に薬の確認とアポの確認をすることになりました。病院は複雑なシステムになっていて、すぐには看護婦には連絡が取れず、半日がかりの戦いでした。看護婦もびっくり。

「ほかの人との書類の入れ間違いですね。すみません、その人の名前とカルテの番号を教えてください。」

大きなため息が聞こえてきました。

「この薬で良いのか、先ず確認したいのです。それから、私の薬局には新しい処方箋を送ってください。きちんとした私のアポの日も教えてください。」

これを取りまとめるのに、更に半日。結局1日が病院のエラーの調整にかかりました。術後の疲れた体とぼーっとする頭で戦うのは大変でした。

マダム田中の戦いはこれではおわらなかったのです。4日後のこと、ドリトル先生の白内障の手術がありました。左目だけでしたが、私は付き添いは無理ですし、長男は多忙。娘にもこれ以上は頼めず、一人で車を運転して出かけていきました。手術は無事に終わり山のような目薬を抱えて帰ってきました。手術は成功でしたが、問題は目薬です。3種類のうち、2種類を2時間ごとに丸二日間、24回ささなければならぬのです。目の手術でパニくるドリトル先生には目薬のタイトな時間管理は到底無理。時々させば良いほうです。というわけで、マダム田中は、丸二日間ほぼ眠らずに、ドリトル先生に目薬を差し出すことになったのです。

「なんで病人の私が。。。？」

術後の回復に不眠不休は良いわけがありません。やっとドリトル先生の目の目薬の手当も山を越え、マダム田中も休みがとれるようになりました。マダム田中は障害物競争のような日を送っております。